

法要のお知らせ

10月と11月の「祥月法要」

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に会い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。

トロント仏教会では、10月11月の祥月法要をin-personとzoomにて行います。

日時：2021年10月3日、11月7日(日曜日) 午前11時から

場所：トロント仏教会、Zoom

※Zoomで参拝される方も、対面式で参拝される方も、その旨を<tbc@tbc.on.ca>までお知らせください。

永代経法要

浄土真宗では、永代供養とはいわず、永代読経=永代経といいます。亡き人のために永代経懇志を上げていただくことで、将来にわたって（永代に）念仏のみ教えを受け継がれていきます。永代経法要では、読経を通して今まで寺院を支えて下さった往生された方にも感謝を申し上げ、お勤めをさせていただきます。



日時：2021年11月21日(日曜日) 午前11時から

場所：トロント仏教会、Zoom

じょうどうえ 成道会

成道とは、お釈迦さまがさとりを開かれたことをいいます。お釈迦さまは、29歳で出家され、それから6年間、苦行をされ、瞑想に入り、49日目の早朝、さとりを開かれました。それが12月8日に当たります。

お釈迦さまは、人は、なぜ死んでいくのか、死んでいくのになぜ生まれてくるのか、この人生にどんな意義があるのか、という人生の苦悩の解決を求めて出家されました。

私たちは、そのことを一生涯知らずにむなしく終わっていくかもしれません。そういった姿を悲しまれ、生死問題を既に解決して下さり、南無阿弥陀仏と喚んで下さる仏さまがおられると教えて下さったのが、お釈迦さまでした。お釈迦さまが成道されたおかげで、今私たちは、生死問題の答えであるお念仏に出遇えたのです。



トロント仏教会では、会をin-personとzoomにて行います。

日時：2021年9月19日(日曜日) 午前11時から 場所：トロント仏教会、Zoom

お勤めの後に成道会にちなんだ法話がございます。どうぞご家族ご友人を誘ってご参拝下さい。

背中を思い出すと、これまでお世話になったことや迷惑をかけたことなどの記憶がよみがえってきます。そのような思い出にふけますと、それと同時にいまも元気で過ごしちよんやろうか、と心配になったり、このコロナ禍でも安全に安心して健康で過ごしちよって欲しいな、と親のことを願うわけです。

こういった話しをお世話になっている先生に話しますと、その先生からは「大内君、大事なことは、願うより先に願われていたことに気がつくことだよ」と言われました。

例えば、私が親に対して健康でいて欲しいと願うより前に、親というのは、私がまだお腹の中にいて生まれるより前から、この子には大きな怪我や病気がなくすくすく伸び伸び過ごして欲しいと既に私のために願っておったということです。

そしてそれは今でも電話をすれば「大丈夫か?」「元気にしちよんか?」と心配し、私のことを願ってくれている存在でもあります。そのため、この手を合わすと時々、遠く離れて暮らしている家族のことを思い出す訳です。そしてそれは私ひとりの体験ではないと思います。多くの人が手を合わせて念仏を申すとき、仏さまの恩徳を感じるとともに大切な人の顔も思い浮かぶことがあるのではないのでしょうか。

では、そんな大切な人たちからいただいたご縁によって出遇わせてもらった阿弥陀如来とは、いったいどのような仏様なのか?それを何とも味わい深く歌って下さったのが、本日の冒頭で紹介させていただきますました原口針水和上の詩、「我れ称え我れ聞くなれど南無阿弥陀 つれてゆくぞの親の呼び声」でございます。

私の口からこぼれ出てくる南無阿弥陀仏。そして私の耳に届いてくれる南無阿弥陀仏。そのどちら

のお念仏も阿弥陀如来の「安心して全てを任せなさい。必ずあなたも私の浄土へ迎え入れる」という呼び声であった。そして、その呼び声は、まるで親が我が子の身を案じて願っている相であるとも言えましょう。

今でも日本の地方のお寺に行きますと、御門徒さんたちが阿弥陀如来のことを「親様（おやさま）」と呼んでいることがあります。それは私のことを常に気にかけてくれる仏様への忝さと、私が阿弥陀如来のひとりの子として念仏申させてもらっていると親しさを込めて「親様」と呼んでいるようです。

その親様とも阿弥陀如来とも呼ばれる仏様は「南無阿弥陀仏」の念仏となつて私の悲しみにも歓びにも慈しみ、はたらきかけてくれます。それはまるで彼岸の日に真西に沈みゆく夕日のように、眩しくも温かく私を照らし包み込んでくれる仏様だと本日は味合わせさせていただきます。合掌

浄土真宗本願寺派 トロント仏教会

駐在開教使 大内祐真

キッズサンガからのお知らせ



トロント仏教会ではキッズサンガ(子ども会)をオンラインと対面式で行っております。Zoomでの参加を希望される方は、kids.sanghatbc@gmail.com までご連絡ください。キッズサンガグループよりZoomリンクが送られてきます。

日時：10月3日(日)、17日(日) 午前10時30分から。
場所：トロント仏教会本堂 / Zoom

※法要後にワークショップなどお楽しみ会を行います。

※法要ならびにワークショップは英語で行います。

秋季彼岸会



トロント仏教会では先月(月)に秋季彼岸法要のお勤めをさせていただきました。本日は、その「彼岸」に関連付けたお話をさせていただきます。少し本題へ入る前に、原口針水和尚という幕末から明治時代にかけて生きておられた真宗僧侶の詩を拝読させていただきます。

我れ称え 我れ聞くなれど 南無阿弥陀

つれてゆくぞの 親の呼び声

我とは私のことで、南無阿弥陀とはお念仏のことです。そしてここにある親とは阿弥陀如来のことです。つまりは、念仏を称えているのはこの私自身だが、その念仏はまるで母親もしくは父親が我が子に「ここにいますよ。安心してね。」と言ってくれる親からの呼び声のようなものだと言われたものでした。

私はこの歌を聞く度に、阿弥陀如来という仏様は絶対的な力強い仏さまというよりは、私たちの悲しみに寄り添い、慈しみを常に抱いてくれるなんとも優しい仏様だなーと感じずにはいられません。

さて、先月は秋のお彼岸法要をご縁に合掌をさせていただきました。彼岸というのは「彼岸」と書き、向こう側の岸という意味です。つまりは仏さまのお浄土をあらわします。向こう側の岸があるとすると、こちらの岸は何というか。「此の岸」と書いて「此岸(しがん)」と言います。つまりは娑婆世界のことです。

そして彼岸の日というのは、一年に二回春と秋に太陽が真西に沈んでいく(太陽の出ている時間と沈んでいる時間が同じになる)日のことです。日本では昔からその真西に沈みゆく太陽を見て阿弥陀如来のお浄土を思い浮かべ、その浄土に往生された今

は亡き方々を偲びながら手を合わせていました。

人が仏様に手を合わせるご縁をいただく背景はそれぞれだと思います。それでもだいたいの人が、大切な人を亡くし、その悲しみの中から自然とその手が合わさっていくのではないかと思います。私自身は田舎のお寺で生まれ育ったこともあり合掌することは日常的なことでもありません。しかし、それでもころから手を合わせ念仏申したのは、一緒に暮らしていた祖母の往生を看取ったのがご縁でした。

病室で危篤状態の祖母へ何と声をかけたらよいのか分からないまま時間だけが過ぎていきました。そのとき祖父がすこし遅れて病院につきまして、祖母の手を握ると一言「ご苦労じやったな。南無阿弥陀仏」と念仏を申しました。周りは「爺ちゃんそれだけでいいの?」と聞きましたが、祖父は「あとは阿弥陀様にお任せします。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とまた念仏を申しました。

それは阿弥陀如来の本願を依り所とし、全てを任せて安心してある姿であつたように思います。その祖父の背中が歳を重ねてだんだん丸く小さくなっておりましたが、阿弥陀如来のお慈悲にしっかりと支えられているように感じたのを今でも思い出します。

このように誰かを失うことをご縁として念仏に出会う人も多いのではないかと思います。しかし最近では、仏縁をくれるのは亡き人だけではないとも感じるので。

例えば、私事ですが本堂で一人、正信偈を称えていますと日本で暮らす家族のことを思い出します。もうここ24年間ほど一時帰国もしてい

ない親不孝者なんですけども、たまに電話をしますと、そんな私にも「元気にしちよんの?」「ちゃんとご飯を食べるん?」と心配をしてくれます。

こうやって親と話していると幼少期のことをたまに思い出します。我が家では毎日、朝の時と夕方の時、そして就寝前に必ず家族そろって正信偈や重誓偈のお勤めをしていました。しかし、まだ字が読めないくらい幼かった私は、よく母の膝上で居眠りをしていました。母親の念仏は心地が良く、いい子守唄になっていたのだと思います。そして今もこうして念仏を称える身になっているのは、そうした居眠りをしながらも、かすかに見えていた父と祖父の仏様へ手を合わせる背中を後ろから見ていたからだと思ふのです。

そういえば最近、日本の小学生から高校生の夢についてのアンケートを取ったニュースを見たのですが、結果はなんと一位が会社員でした。私が小中学生だったときは「プロ野球」や「消防士」などがだいたい的一位だったと思います。しかし最近では、コロナの影響で在宅勤務をする会社員が増えて、子ども達が親の仕事をしている姿をよく目にするようになったのが大きな要因だそうです。

日本では昔から「背中で語る」や「子は親の背中を見て育つ」という考え方がありますが、まさに子ども達は親の背中を見て育つものだとそのニュースから考えさせられました。そのようなことを考えていると私も小さいときから仏様に手を合わせる家族の背中を見て、それが仏縁となつていま念仏をしているのかもしれない。

そのような親の念仏する姿や合掌している

佛心



「浄土真宗のみ教え」
についての親教

本年も、皆さまと共に立教開宗記念法要のご勝縁に遇わせていただきました。立教開宗とは親鸞聖人が『教行信証』を著して他力の念仏を体系的にお示しになり、浄土真宗のみ教えを確立されたことをいいます。この法要をご縁として、私たちに浄土真宗のみ教えが伝わっていることをあらためて味わわせていただきます。

さて、仏教を説かれたお釈迦さまは、諸行無常や諸法無我という言葉でこの世界のありのままの真実を明らかにされました。この真実を身をもって受け入れることのできない私たちは、日々「苦しみ」を感じて生きていますが、その代表的なものが「生老病死」の「四苦」であるとお釈迦様は表されました。むさぼり・いかり・おろかさなどの煩惱を抱えた私たちは、いのち終わるその瞬間まで、苦しみから逃れることはできません。

このように真実をありのままに受け入れられない私たちのことを、親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫」と言われました。そして、阿弥陀如来は煩惱の闇に沈む私たちをそのままに救い取りたいと願われ、そのお慈悲のお心を「南無阿弥陀仏」のお念仏に込めてはたらき続けてくださっています。ご和讃に「罪業

二〇二二年一〇月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会

もとよりかたかなし 妄想顛倒のなせるなり」
「煩惱・菩提体無二」とありますように、人間の分別がはたらかき出す前のありのままの真実に基づく如来のお慈悲ですから、いのちあるものすべてに平等にそがれ、誰一人として見捨てられることなく、そのままの姿で摂め取ってください。

親鸞聖人は「念仏成仏これ真宗」（『浄土和讃』）、「信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり自然はすなはち報土なり 証大涅槃うたがはず」（『高僧和讃』）とお示しになっています。浄土真宗とは、「われにまかせよそのまま救う」という「南無阿弥陀仏」に込められた阿弥陀如来のご本願のお心を疑いなく受け入れる信心ただ一つで、「自然の浄土」（『高僧和讃』）でかたちを超えたこの上ないさとりを開いて仏に成るといふみ教えです。

阿弥陀如来に願われたいのちと知らされ、その温かなお慈悲に触れる時、大きな安心とともに生きていく力が与えられ、人と喜びや悲しみを分かち合い、お互いに敬い支え合う世界が開かれます。如来のお慈悲に救われていく安心と喜びのうえから、仏恩報謝の道を歩まれたのが親鸞聖人でした。私たちも聖人の生き方に学び、次の世代の方々にご法義をわかりやすく伝わるよう、ここにその肝要を「浄土真宗のみ教え」として味わいたいと思います。

浄土真宗のみ教え

南無阿弥陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の 弥陀のよび声

私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ
「そのまま救う」が 弥陀のよび声
「ありがとう」といただいて
この愚身をまかす このままで
救い取られる 自然の浄土
仏恩報謝の お念仏

み教えを依りどころに生きる者 となり
少しづつ 執われの心を 離れます
生かされていることに 感謝して
むさぼり いかりに 流されず
穏やかな顔と 優しい言葉
喜びも 悲しみも 分かち合い
日々に 精一杯 つとめます

来る2023（令和5）年には親鸞聖人御誕生800年・立教開宗800年慶讃法要をお迎えいたします。聖人が御誕生され、浄土真宗のみ教えを私たちに説き示してくださいましたことに感謝して、この「浄土真宗のみ教え」を共に唱和し、共につとめ、み教えが広く伝わるようお念仏申す人生を歩ませていただきます。なお、2018（平成30）年の秋の法要（全国門徒総追悼法要）の親教において述べました「私たちのちかい」は、中学生や高校生、大学生をはじめとして、これまで仏教や浄土真宗にあまり親しみのなかった方々にも、さまざまな機会で引き続き唱和していただき、み教えにつながっていくご縁にさせていただきたいと願っております。

2021（令和）年4月15日